

最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学 臨床講師 妹尾真理子に対する最終試験は、主査 槻木恵一教授、副査 向井義晴教授、副査 星 憲幸 准教授により、英語の文献読解力ならびに関連事項につき口頭質問をもって行われた。また、外国語の試験は、主査 槻木恵一教授によって、英語の文献読解力について口頭質問により行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 槻木 恵一 教授

副 査 向井 義晴 教授

副 査 星 憲幸 准教授

論 文 審 査 要 旨

シェーグレン症候群患者における唾液分泌量と
う蝕経験歯数との関係

神奈川歯科大学

臨床講師 妹尾 真理子

(指 導 : 岩渕 博史 准教授)

主 査 槻木 恵一 教授

副 査 向井 義晴 教授

副 査 星 憲幸 准教授

論文審査要旨

シェーグレン症候群（以下 SS と略す）は、中年女性に好発する自己免疫疾患で、唾液腺や涙腺などの組織の破壊が認められ、口腔乾燥症を呈することから歯科疾患として重要であり、難病指定にもなっている。SS では、これまでの研究でう蝕発生率が高いことが横断的研究で明らかとなっており、SS の診療ガイドラインでは、う蝕予防のために唾液分泌の促進が推奨されている。しかし、唾液分泌促進がう蝕の予防に効果があるかの証拠は十分ではなかった。以上の背景から、本研究は唾液分泌量増加が、う蝕経験歯数の増加を抑制するかどうかを後ろ向き研究で明らかにしようとしており、その目的は背景から鑑みても非常に明確であり意欲的な研究であると評価できる。

用いた方法は、定期的に診療を行っている SS 患者のうち、症状が安定している初診から 1 年以上の 165 名とし観察期間が 2 年未満の患者は除外した。なお、唾液分泌促進薬服用患者では、24 か月以上経過した患者を含んでいる。唾液分泌量の指標は観察開始時と終了時の 10 分間ガムテストの平均値（平均唾液分泌量）、観察開始時と終了時の 10 分間ガムテストの差（唾液分泌量変化値）とした。また、観察開始時と終了時の D、M、F、それぞれの差を D 変化量、M 変化量、F 変化量とした。

統計解析は平均唾液分泌量および唾液分泌量変化値と D、M、F 変化量との相関関係を Spearman の検定にて求めている。さらに喪失歯数増加に影響する因子を求める目的で、ロジスティック回帰分析にて多変量解析を行っており、統計解析の方法については適切であると確認した。また、研究倫理の手続きも問題を認めなかった。

結果として、平均唾液分泌量と M 変化量との間に弱い負の相関関係が認められている ($P=0.047$, $r=-0.155$)。唾液分泌量変化値では、D、M、F 変化量の何れとも相関関係はみられていない。また、M 変化量は D 変化量および F 変化量との間に負の相関関係が認められている ($D:P=0.011$, $r=-0.197$, $F:P<0.001$, $r=-0.531$)。多変量解析では、平均唾液分泌量減少と唾液分泌促進薬服用期間が喪失歯数増加の危険因子であった ($P=0.043$, $OR=1.014$, $P=0.028$, $OR=0.914$)。以上の結果は明瞭に示されていた。

本論文の中核となる結論は、SS 患者では唾液分泌量の減少が喪失歯を増加させるが、わずかに唾液分泌量を増加させるのみでは DMF は減少しないことを示唆した点である。一般的に、唾液分泌減少によりう蝕歯数は増加するものと考えられるが、一方で分泌量の増加を目指した治療では、う蝕歯数の減少について統計的に有意な改善が見込めていない。このことから、唾液分泌量の増加に依存するだけでなく、その他の方法を用いて複合的に対応する必要性が明らかになり、臨床的には非常に意義の高い内容を含んでいると高く評価できる論文である。

本審査委員会は申請者が博士（歯学）の学位に十分値するものと認めた。